論　文

セフェリスと女性

－詩人におけるCurriculum Vitae Sexualis 素描－

志田　信男

§.1　プロロゴス

セフェリスの妹ヨアンナは、その著書において、実に率直に、おそらく日本女性には考えられないほどにあけすけな態度で兄セフェリスと女性について語っている。このことについては、拙稿「セフェリスのバイディアー幼少時代の父と子」[1]の中で、1つの問題提起として、次のように述べた。

「ヨアンナ・ツアツオスは、その著『わが兄セフェリス』[2]の中で幼少時代のセフェリアディス一家の生活を生き生き画いているが、その中でまず母デスポについて、次いで父について多くの貴重な証言をしている。兄セフェリスについてはもちろんである。この本は肉親による直接資料として、セフェリス研究にとっては、貴重な証言にみちた興味深い本である。　実をいうと、拙著『セフェリス詩集』（土曜美術社,1988）にあたって、筆者はこの本を未見であった。もし読んでいたら筆者のセフェリス観、特に彼の＜フェミニズム＞もしくは、＜女性観＞について一つの知見を加えることができたかも知れない。詩の解釈についても仝様である。従来重厚で暗いとされているセフェリスの詩も翻訳してみて、以外に軽快な『色っぽい』詩があるのに気がついていたが、これも偶然ではないのである。」[3]

今回は、セフェリスと女性について、ヨアンナの記述に基づいて考えてみよう。彼女は兄の好色な性向について、そしてその女性遍歴の数々を一種特別な肉親の視点から愛情をこめて語っている。それは妹の視点というより、むしろ母親か年上の肉親－姉のそれといった方が分かり易い視点のように思われる。いずれにせよこの側面に関する彼女の証言は、セフェリスの作品解釈や作品鑑賞にあたっての私達の視界を拡大し、深化させてくれることは間違いないのである。彼の物静かで深く沈痛な詩の表情の背後にみえかくれするある種の軽快さ、ユーモア、機知とも通底する部分と考えられないこともないのである。直接指摘されているだけでも、恋愛詩「エロティコス・ロゴ

ス」が、ジャクリーヌとの悲劇を扱ったものであることや、第一詩集「転回点」中の「あなたはゆっくりと話した」[4]に登場するビリオという女性もセフェリスの人生の一頁で重要な役割を果たした人物であることが分かるのである。

§.2セフェリスにおける女性の重要性

ヨアンナはこの本の中でいくつかの重要な証言をしている。セフェリスの女性観、もしくは数々の女性との関わりを解釈する上で、本質的で端的な証言である。特にそれは要約すると次の２つのキイ・センテンスに集約されているのであって、その(1)は英訳をそのまま引用すると、 < Women were always important in his life. >[5]であり、その(2)は < Women liked George>[6]である。人間だれしもその人生において異性は重要である、しかし、' always important' という一句は、ヨアンナの兄セフェリスについての人間的な理解と洞察の深さを示唆するものである。第２点は、名門の出で、眉目に秀でた多感の詩人であり、エリート外交官でもある彼が、多くの女性の関心を引き、愛されたことを示しており、何ら不思議なことではない。

先日たまたま大庭なみ子氏の「伊勢物語」を読んでいたら、［解説］の部分で、目加田さくを氏が次のように述べていた。

「･･･和歌をよくす、と認めているように、彼（業平）は天才歌人の資質をもっていました。高鳴る浪漫精神とあふれる情熱をもった美しい貴公子の行くところ、愛が芽生え、歌が生まれました。それが業平の歌です。」[7]

別にセフェリスを業平に比するつもりはないが、< Women liked George> の背景を考えると一脈通ずるところがあると思うのである。

さて上述の第１点と第２点の結合は、当然ながら、華麗なセフェリスの恋愛関係を予告するものである。しかしこのことは、セフェリスの人格を、いわんやその詩業をそこなうものでは決してないのである。

セフェリスとヘンリー・ミラー，ロレンス・ダレルとの親交については書いたことがあるが、彼らは革新的な性の探求者でもあった。1940年のミラー宛の書簡の中で、ロレンス・ダレルはいっている。

「･･･『トロイラスとクレシダ』をお読みになって下さい。そうすれば、バルカン半島の人々の気性がわかります。『戦さと色事！』セフェリスと、カツインバリスに会っていますが、それはまるで古代人の会合のようです。われわれが交わすのは、むしろ沈黙であって、パイプを吹かしたり、たばこを吸ったりするだけなのです。そして、このきびしい世界をよそに、喜悦に

満ちた青葉の季節が続いています。…」[8)]

このようなバルカン半島的な気質は当然セフェリスにも、少なくとも風土的素地としては備わっていたであろう。また、ミラー等との交友における話題は、文学であり、政治であり、ナチズムの嵐の吹く厳しい時代の様々のトピックスではあったろうけれど、個人的な親密さの中で、女性観や性的なエピソードが話題にのぼったであろうことは想像に難くないのである。

悲劇ヒツポリュトスにみられるように、ギリシアでは、古来、愛の女神アプロディテに逆らうものは、それ自体ヒュブリスの罪を犯すことになる。セフェリスの血の中には古代ギリシア人の血が脈々と流れている、もちろん彼は敬虔な正教徒ではあったけれどもアイスキュロスを語り、時にギリシア正教の葬儀にアドニスの祭儀を重ね合わせてみることのあるヘラス人である。多彩な女性遍歴もあながち不思議ではないし、妹ヨアンナが淡々として兄の性遍歴を語るのも、そうしたヘラス人のエートスのなせる業であろう。日本人のこちたき似而非道学者流の感覚の理解を超えた自然の流れというものかも知れない。

ここに語られたセフェリスと女性たちの姿、そしてそれに対する身内の、時として小姑的な愛情を赤裸に表現しているヨアンナの記述は微苦笑を禁じえないものがある。

以下に＜セフェリスをめぐる女たち＞について、彼女の記述にしたがって紹介してみよう。

§.3　恋愛遍歴

ヨアンナの前掲書に登場する女性は、幼友達のメルポにはじまってスザンヌ、キルステン、キルステンの友人、ビリオ、ジャクリーヌ、後年妻となるアンドレアス・ロンドスの妻ーこの人が彼の妻マリア・ザヌウであろうかー等多彩である。この他スキャンダラスな噂を生んだというセフェリスと共に騎乗して森に消えた女性など枚挙にいとまのない華麗さである。

以下、これらの女性とのかかわりあいについて、いわゆる＜串刺しおでん式＞に物語ってみよう。

妹の友人にメルポという美少女がいた。12才、セフェリス16才の頃の話しである。恋に恋する背の高い栗色の髪をした美少女で、初恋の人といってよい。セフェリスは、＜ラブ・ソング＞を彼女に贈り、朗読して聞かせた。

「『それで？』

『それでさ、彼女はじっと僕の詩を聞いていたんだ。そして＜何て美しいんでしょう＞っていったよ。』あとは黙っていた。」[9]

誰にでもありそうな幼い微笑ましい初恋の風景である。

1919年セフェリスはパリの下宿の娘スザンヌに恋をする。ブロンドの美女で年上であった。ヨアンナはこの女性に対して、厳しい評価を下している。貪欲で、男を吸い盡し、干上らせ、心と魂を打ちくだいて己れの力の中に封じ込める女、手練手管にたけ金が無くなると＜金のない男は嫌い・・・＞という女。

どうやらセフェリスは海千山千の女に手玉に取られたらしい。19才の時のことである。

1920年にはノルウェーの少女キルステンが登場する。美女であり、セフェリスを愛した。

彼女は金を要求せず、結婚を求めなかった、とヨアンナは述べている。この辺の記述にヨアンナのセフェリスの女友達に対する一つの視点があるようである。妹というより姉や母に近い視点かも知れない。名門の家庭の小姑の目といってもよいかも知れない。キルステンは1921年２月帰国する。そして同年、セフェリスはキルステンの友人の一人と恋に落ちる。またこの年アテネから来た一人の美女との束の間の出合いがあったという。恋の遍歴が始まったのである。事実上の最初の女性スザンヌから受けた傷がそれだけ深かったということかも知れない。がもしかすると彼本来の性向にようやく目覚めたといえるのかも知れない。

＜彼女（たち）は僕にやさしくしてくれました。けれどこのオフィーリアたちはみんな僕を傷つけ、僕の魂から甘美な血を流させます。＞と彼は妹に書いている。＜甘美な血を流す＞ことをギリシア語では γλυκοματώνω というらしい。甘美な響きのある動詞である。

1921年、彼はスザンヌと再会する。しかしもはや彼女は彼にとって何物でもなかった。彼女との関係は過ぎ去った情事にすぎなかったのである。

1921年５月、一人のチャーミングな少女が漸時彼を慰めてくれるのだった。キルステンは徐々に北国のもやの中に姿を消していった、とヨアンナは書いている。キルステンはこの時期のセフェリスにとって、忘れ難い印象を残した女性であった。

1923年２月セフェリスは18才のジャクリーヌと出会う。ジャクリーヌは真の意味でセフェリスにとって初恋の人といってもよいのかも知れない。彼女

の父母との関係等から、この恋は実らなかったが、ヨアンナもこの女性とセフェリスについては、温かいまなざしを注いでいる。

「少なくとも11年間にわたって、彼らの別離と他の女性たちとのセフェリスのかかわりあいにもかかわらず、ジャクリーヌは－というのもこれが彼女の名前だったから－彼の支配的な関心事（ dominant concern ）であった。彼の恋愛詩の大半は彼女に捧げられたものである。エロティコス・ロゴスは彼らの悲劇がテーマである。」[10]

ヨアンナはさらに、最初の出会いからして、一人の男の人生において、真底重きをなす女性がいる。と述べている。ジャクリーヌは優しく心の温いピアノを弾く女性であった。彼女はギリシア語はあまり話せなかった、だからセフェリスの人生航路にはついてこれなかったろう、とヨアンナは述べている。ともかく様々の事情で二人の仲はついに結ばれず1934年ジャクリーヌはある音楽家と結婚、セフェリスは悲しみの底に沈んだ、という。

1928年にはビリオが登場する。ここでヨアンナは、冒頭にかかげた ＜Women liked George.＞の名言を叶いている。そして他の女性たちは、彼のジャクリーヌに対する愛も、ビリオと呼ばれる人との結びつきも知らなかった、と述べている。セフェリスは自制的な秘密主義の人だった、ようである。

ビリオは素晴らしい女性だった。

「非凡な音楽の素養と素晴らしい感受性を持った真の女性がヨルゴスと恋に落ちた。彼女は結婚していた。少し彼より年長だった。そして、ジャクリーヌとの恋愛劇の理解者だった。彼女は嫉妬心なしに、愛と女性らしさと賞賛の念を抱いて、彼に優しく近づいた。彼女は彼に率直だった。なによりも彼女は、彼に誠実であることを要求しなかった。ヨルゴスは感謝の念を持って彼女を受け入れた。

そしてあなたはわたしの運命の横糸だった。
あなた、人呼んでビリオ

この苦痛を伴わないヨルゴスの恋愛物語は、他の恋と平行して何年間も続いた。＜人呼んでビリオ＞なるこの女性は、彼にとって大いなる救いだった。しばらして、彼女は沈黙の中に消え去った。」[11]

ヨアンナは兄ヨルゴスの恋愛沙汰のすべてに通じていたようである。そして兄の立場に立って、あるいは身内の女性の立場から女性たちを冷静に評価している。

ヨアンナはまたもう一つのエピソードをかくさず伝えている。1935年のことである。

「ヨルゴスは海と山を愛した。ある時、皆でベリオン山へ行った。徒歩とラバで。一人の美女が来た。ある朝かれらは馬にのり、彼女は長い髪をなびかせて、森の中に消えた。村中のスキャンダルになった。」[12)]

1936年夏、セフェリスはアンドレアス・ロンドス婦人と知り合う。娘ミナとアヌーラがいた。彼は後年この人と結婚する。

§.4　結語

水上勉氏は、その著「わが六道の闇夜」の中で「一期一会の女や男たちが、今日の私をささえてくれている。」[13)]と述べているが、セフェリスの半生もまた同じようだったように思われる。

ヨアンナは述べている。

「女性は彼の人生においては、常に重要な存在でした。女性的な要素が常に彼を追求していました。彼の蜜蜂のように好色な性格（ erotic disposition）は、女性の蜜を絶えず探し求めていたのです。そして彼のことばの錬金術が一人一人の女性にその時々の性格を与えていたのです。」[14)]

兄を冷静にしかし温かい目でみつめているヨアンナの寛大さは、そしてその赤裸性はどこから来ているのだろうか。かつて川端康成の死後、臼井吉見が＜事故のてんまつ＞を書いて遺族から訴えられた事件があったが、日本では、このようなヨアンナの素直さは考えられないであろう。否、日本でもかつて王朝時代やさらにさかのぼって記紀万葉の時代には性が大らかに讃美され語られた時代があった。万葉の東歌の世界はもとより、伊勢物語、源氏物語の世界もerotic dispositionをもった男や女の物語の世界である。

ヘンリー・ミラーやロレンス・ダレルとのセフェリスの親交も決して偶然ではないであろう。がここにとりあげたのは、セフェリスの一側面にしかすぎない。セフェリスが偉大な詩人であり、思想家であり、優れた外交官であり、ギリシア国民の真のパイデイアの担い手であることに変りはないのであ

る。
<Es irrt der Mensch, solang'er strebt>とゲーテもいっているではないか。

（追記、本稿は1987年12月19日、プラティア・ミコノスの会年末例会において、「セフェリスとその周辺」と題して講演した時の<女たち>に関する部分を骨子として、今回書き下したものである。資料はもっぱら当時のノートによっている。ただしここに述べられた私見は、この問題に関する現時点における筆者のものである。1990.12.8）

注

1)プロピレア、第１号、1989、ギリシア語文学研究会
2)Ioanna Tsatsos, My Brother George Seferis, A Nostos Book, Minneapolis, Minnesota, 1982. 以下、ヨアンナの証言はすべてこの本によっている。特に大きい引用以外はいちいちその箇所を示さない。なお、現在筆者によってこの本の翻訳が進められている。セフェリス研究のためだけでなく、セフェリスを軸にして、ヨアンナの目に映った当時のギリシアの現代史的研究のためにも数々の貴重な証言に満ちた名著である。
3)前掲プロピレア、第１号、pp.5～6
4)拙訳詩集「セフェリス詩集」土曜美術社、1988.p.8のセフェリスの処女詩集「転回点」中の「あなたはゆっくりと話した」参照。ちなみに現在「セフェリス全詩集」の計画が進行中である。
5)ヨアンナ・ツァツオス、前掲書、p.230
6)仝上、p.178
7)大庭みな子の竹取物語／伊勢物語（わたしの古典３）、創美社、1986中の目加田さくを氏による［解説］p.262
8)ミラーダレル書簡集、中川敏・田崎研三訳、p.160
9)ヨアンナ・ツァツオス、前掲書、p.21
10)仝上、p.140
11)仝上、p.173
12)仝上、p.223
13)水上勉著、わが六道の闇夜、中央公論社、1980（1976初版）、p.131
14)ヨアンナ・ツァツオス、前掲書、p.230